マイゾウ・メーノス（まあーまあー）の世界　ブラジル
　　ブラジルを訪問する人、ブラジルに関心のある人にお勧めする！！

梅津 久　記

第5話－アミーゴの世界

政府相手のめんどうな時間のかかる仕事でも“アミーゴの世界（友人の世界）”で何とかしてしまうしことがとても多い、袖のした（プロピーナ、またはエンバイショ・ド・パーノと言われる）も良く使われる、しかしこれは注意しないと相手はだんだんと金額を上げて来るし、ひどくなると癖になって袖の下を使わないと仕事が進まなくなってしまう。

ブラジルはまだまだペーパーワークの仕事が多く、どこに行っても列の世界でもある。銀行で貯金のお金の出し入れを始め、公共料金の支払い、月賦、クレジットカード、その他さまざまな支払いが銀行経由で行われるため、今では全ての銀行に自動支払い機があり、システム化が進んで来たにもかかわらず、いまだに長い列はなくならず、３０分、１時間と待たされる。これが銀行にアミーゴでもいれば、列に並ばず、傍から「これ、やっておいて」とすぐ出来てしまう。公共機関でも山になった順番待ちの書類をアミーゴに話を付ければ、いつのまにか下の方から一番上に置くことが出来、すぐに処理される。日本のように“義理・人情・恩”の存在しないここブラジルでは、この“アミーゴの世界”の絆は“マイゾウ・メーノスの世界”ブラジルでは公私に渡り非常に大事な武器であり、人と人の間を結ぶ友情の絆には大いに役立ち、楽しく生活出来るカギなのかもしれない。

例えば、車を運転していて、なんらかの理由により道路警察に捕まった場合でも、道路警察のアミーゴの名前を言うと、「わかった、この次は気を付けて」ということになる。こんなこともあった、知人の子供が麻薬容疑で警察の留置所に入れられた時、その親が私に家を尋ねて「誰か、警察の人か、または弁護士を知らないか」と言ってきた、あいにく私には警察の友人はいなかったが、後で聞いたら、その日の夜、他の友人を通して、留置所から子供を出すことが出来たと聞いた。

また、良くブラジル人の会話、特に挨拶の時、「オー、メウ・アミーゴ（私の友人）」、「オー、メウ・イルマーン（私の兄弟）」と挨拶を交わし、「オー、ミニャ、フーィリャ（私の娘）」、「オー、メウ、アモール（私の愛人）」とまでなってくる、この様に、人と人の輪は“アミーゴの世界”でいくらでも広がって行く、ブラジルで楽しく、有意義に暮らしていくのには、どれだけのアミーゴが出来るかで決まっていくように思う。この“アミーゴの世界”は肌と肌との触れ合いである握手から生まれる、どれだけシッカリと相手の手を握

れるかがアミーゴの深さを表す、また懐かしさのあまり両手で握手するし、抱き合ってお互いに背中を叩きあうこともある。また相手が異性の場合は、お互いに握手した右手を引き合い、そのままの体勢で相手の右頬、左頬、右頬と3回キス（キスをするといっても唇を相手の頬に当てるのではなく、頬と頬を合わせる感じです）繰り返す、異性間のこの挨拶は本当に親しい人か、またはなにか記念の時の特別な挨拶以外は余り行ってはいけない。ごく自然に行えるように練習しておいてください。

また、値段の決まっていない、小さな取り引きは本当に“マイゾウ・メーノスの世界”である。ここマナウスには有名な観光地、“エンコントラス・ダス・アーグアス（アマゾン河の地理名称の発祥である、ネグロ河とソレモンエス河の合流点）”があるが、時間を充分と取れない日本からの出張者が唯一簡単に見に行ける方法としては、工業団地に近い“ポルト・ディ・セアーザ（セアザー青果市場ーの港）”から、船外機を取り付けたアルミ製のボートで往復1時間もあれば充分に見て来れる方法があるが、この値段をボートの持ち主とネゴするのが難しい、これと見てすぐに日本人とわかるお客さんには遠くに止めた車の中で待ってもらって、一人歩いて行って交渉に入る、彼等はまず通常の倍の値段を言って来る、それを慌てずゆっくりと半額までに持っていく。これは、値段の決まっていないネゴでは常に伴う、まず相手は倍の値段を言って来ると覚悟して交渉しなければならない。我々日本人は良心がじゃまするのか、交渉がへたなのか相手のいうようになってしまうのが普通である。これだから“日本人は金になる”と何時も見られてしまう。

ラランジーニュとネグロ川　（2008 年 11 月撮影）

マナウス市の郊外でトロピカル・ホテルという一流ホテルの近くに、“ポンタ・ネグラ（黒い先端という意味ーたぶん町からはネグロ河の端っこになるからか？）という市民の憩いの場であり、また市唯一の海水浴場（海水ではなくアマゾンのネグロ河の淡水の砂浜）があり、そこに野外ステージのほか軽飲食スタンドがある。週末にはミュージックバンドがダンサーを伴ってのショウを夜遅くまで開いている。そこには一夜の歓楽とお金目当ての女性がたむろしており、日本人と見ると、「ポッソ・センター（ここに座っていいか？）」、「メーダ・ベビーダ（飲み物をおぐってくれない？）」、「ケーロ・ジャンタール（食事をしたい？）」と最後はお金目当ての交渉になってしまう。一緒に飲み物を飲むだけでそれ以上期待しない時は、なんと言われようと、断固とことわらないと面倒なことになる、相

手はあきらめてどこかに行ってしまう。

*追記－　このポンタ・ネグラの屋外ステージに一番近い軽飲食スタンドの名は“ララランジーニャ（小さなオレンジ）”と呼ばれている、現在遊歩道の改装工事で昨年から閉店となっています。この“ララランジーニャ”に関しては、別途小話でお話いたします。

－次回　第 6 話へ続く－